

# 一型糖尿病患者とその家族の避難生活に備えた 取り組みと課題

豊田真都

本研究の目的は、災害発生時に避難生活を送る一型糖尿病患者およびその家族を対象に、災害に備えた取り組みの実態と課題を明らかにし、命と健康を守るための備えの行動モデルを提示することである。一型糖尿病患者は日常的にインスリン投与や血糖管理を必要とするため、災害時には特有の健康リスクを抱える。しかし、患者本人および家族の備えの実態や課題は十分に整理されていない。そこで本研究では、当事者の視点から災害への備えを検討した。

先行研究として東日本大震災の際の一型糖尿病患者の対応事例を整理した。次に、同震災の教訓を踏まえて作成された『インスリンが必要な糖尿病患者さんのための災害時サポートマニュアル』を分析し、その有効性と課題を検討した。さらに、SNSを通じて一型糖尿病患者 46 名および患者家族 13 名を対象にアンケート調査を実施し、単純集計およびクロス集計による分析を行った。

その結果、多くの一型糖尿病患者および家族が災害への備えの必要性を認識している一方で、インスリンや血糖測定関連物品、低血糖対策用補食などの準備が十分でない実態が明らかとなった。また、避難所生活では、医療支援や情報不足への不安、食事管理の困難さ、注射や血糖測定に伴う心理的負担が大きいことが示された。さらに、災害時の対応について患者本人と家族の間で十分な話し合いがなされていないケースも多く確認された。これらのアンケート調査の結果と先行研究の分析を踏まえ、災害発生前の段階において一型糖尿病患者本人およびその家族が備えるべき要素として、「物品」「情報」「コミュニケーション」の三つの観点が重要であることが明らかになった。そこで本研究では、これら三つの観点に基づき、患者本人と家族それぞれに求められる行動を整理した行動モデルを提示した。

本研究の学術的意義は、これまで医療体制や行政支援といった支援する側中心で論じられてきた災害研究に対し、一型糖尿病患者本人およびその家族を対象とした調査から、災害時に直面する具体的困難や備えの実態を明らかにした点にある。また、一型糖尿病患者という外見からは判別しにくい「見えにくい災害弱者」が抱える課題を可視化した点にも意義がある。さらに、筆者自身が一型糖尿病患者である当事者の立場から検討を行ったことで、災害時の備えを医療品の準備にとどめず、周囲への伝え方や必要な配慮といった不安の根幹に着目して論じることが可能となった点も、本研究の重要な意義の一つである。